平成二十七年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評に代えて　図書館長　一般科目・国語科教員　山田繁伸……1

入選　第1位　『永遠のO』を読んで　情報工学科　一年　井上響生……2

入選　第2位　『あっこと僕らが生きた夏』を読んで　機械工学科　一年　宿野圭佑……3

入選　第3位　十人十色―『レインツリーの国』を読んで　都市・環境工学科　一年　佐藤美鳩……4

佳作　『智恵子抄』を読んで　機械工学科　一年　篠田侑実……5

〃　『永遠のO』が教えてくれたもの　電気電子工学科　一年　松﨑萌花……6

〃　『犬と私の10の約束』を読んで　都市・環境工学科　一年　岡﨑夢乃……7

〃　強く優しく―『氷点』を読んで　都市・環境工学科　一年　手嶋萌……8

〃　心理の真理―『WILL』『翼』を読んで　都市・環境工学科　一年　若菜遼甫……9

〃　『神様のシナリオ』を読んで　都市・環境工学科　二年　小谷華加……10

〃　幸福になるには―『自分の人生に一番いい結果を出す幸福術』を読んで　電気電子工学科　三年　平野音瑠……11

編集後記　学生図書委員長（電気電子工学科　五年）　平野瑠唯……13

平成二十七年度
校内読書感想文コンクール

講評に代えて

図書館長
一般科目・国語科教員
山田繁伸

昨年度のコンクールは、試行的に詩歌部門を加えてみた。非常勤講師の竹内乃里子先生をはじめ詩人の青木繁美先生も選者にお願いでき、それなりに充実したコンクールとなった。しかし、投稿ジャンルの片寄りや選者の確保等の問題もあり、今年度は従来の読書感想文コンクールに戻した。第一次審査として低学年から二十二編が選ばれた。私の関係した一年生では、一四二編から十八編を選び出し、第一次審査とした。第二次審査は、図書館運営委員会五名の教員と学生図書委員会五名の学生とによってなされた。更に第三次審査で最終的に入選作十編が決定された。例年のことではあるが、四、五年生の参加が少ないのは今後の大きな課題である。

戦後七十年の節目の今年は、戦争や平和がより強く意識させられた。その中で『永遠の〇』を選んだ感想文が第一位に選ばれた。井上君は作品を丁寧に読み、主人公の内面にまで思いを寄せている。知覧や親戚での体験によって戦争や平和の問題を自分の問題としてとらえている。佳作の松﨑さんの感想文もよかったが、焦点を絞って深く掘り下げて書くともっと評価されたであろう。第二位の『あっこと僕らが生きた夏』は、同年齢の高校生の生と死に素直に感動している点が評価された。大分県内の高校での実話である。第三位の『レインツリーの国』は、難聴という障害を乗り越えお互いが分り合ってどう生きるかと言う問題を深く考えている。作品では主人公の利香や伸行がネットで知り合い、ハンドルネーム「ひとみ」や「伸」で交流する。他の佳作も、読書が生活の一部となっていることがうかがえ、甲乙付けがたい。読書感想文は甲乙をつけるべきものではないのかも知れない。読者それぞれの味わい方があるのだから。

ところで、最近の傾向であるが、ノンフィクションや最新の話題作がよく読まれているようである。それはそれでよいのだが、世界の名作や日本の古典的な小説の読書が減少しているのであれば寂しい。読書の勧めで挙げられる名作は重たい感じがするし、実際読んでも深いところは分らないかも知れない。例えば、夏目漱石の名作は彼が東大の教員を辞めて本格的に小説創作に打ち込んだ晩年十年間のものである。若者が漱石の人生後半の思索の深奥を易々と理解することは難しいであろう。しかし、十代から二十代にかけて名作を読むことには意義があると思う。今すぐに何かに役立つことはないかも知れないが、じわりじわりと、あるいはある日突然、自分の考え方や感じ方に資することが起こるかも知れない。当てもないことに時間を費やすことに躊躇する人もいるだろう。私もそうだが、人は普段はそう大した時間を過ごしてはいない。ならば、名作を読みその中で貴重な体験をすることは意義深いことではなかろうか。

経済学者の内田義彦氏が『読書と社会科学』（岩波新書）で、二通りの読み方を示している。それは、「情報として読む」のと「古典として読む」との二通りである。「情報として読む」のは、仕事や趣味のためすぐに役立つ知識や情報を入手するための読書である。一方、「古典として読む」のは、古典と言われている名作を読むことを指すのではないが、古くから知っていることを、眼のもう少し奥のところで受け取り情報の受け取り方を変えるような読み方であると説いている。一回読んでその本は不要ということではなく、折に触れて再度読み直すに値する本を読むことである。内容は分っているが読み直す。そういう本に出会うには友達の意見も参考になろう。そして、自分でいろいろ読んでみることだ。読み直すに値する名作は比較的長いものが多い。五年間という時間に高専生は恵まれている。何度でも読み直したくなるような自分の古典を在学中に見つけてほしい。

第1位

『永遠のO』を読んで

情報工学科　一年
井上　響生

今年は戦後七十年で節目の年ということもあり、テレビで沢山の特集番組を見る機会が多かった。そんなこともあり、今回は迷うことなく『永遠のO』を読むことにした。

正直、漢字も多く、なにより戦闘機や対戦名、島の名前等読み進めるにあたって、難しいところも多く、最初は断念しそうになった。しかし、少しずつ読み進めていくうちに、不思議なことに内容に集中して、先を読みたい気持ちからか、難しい言葉も気づけば苦にならずに読み終わっていた。

自分が想像していた戦争物語とは違っていたのも読みやすかった原因の一つでもあったと思う。戦争については、小学生の頃から平和授業などで何度か勉強し、物語も読んだことはあったが、この『永遠のO』は自分が今まで読んだものとは、どことなく違っていた気がした。

まず、考えさせられたのは、戦争に向かう兵士の食事の話のところだった。東野二飛曹が、「命を懸けて戦ってるんだ。大福くらい喰わせてもらってもいいだろう。」と、みんなを笑わせる。しかし、大福の並んだ夕食の席に東野二飛曹が戻ってくることはなかった。

「彼の食卓に置かれた大福には誰も手をつけませんでした。そしてやがてそんな光景が当たり前の日常になりました。」

戦闘のシーンなどは、映像等で見て、想像することができる。しかし、実際の恐怖感、失望感などは感じることができない。今の自分にとっては、あまりにも非現実的であり、今の自分が戦闘機に乗り国のために戦うことなど、どれだけ考えてもわからないところがある。しかし、この食事のシーンは想像ができる。朝、当たり前に笑っていた人が、その日の夕食の時にはいない。自分の家族、友達としてみても、容易に頭に浮かんできて、なんとも言えない気持ちになる。ましてそれが「当たり前の日常」になるのだ。大切な友人、家族が何時もいるのが当たり前でない毎日。約束ができない毎日。そんな中での、宮部久蔵の約束を守る生き方、愛し方、優しさが最後に伝わってきた。宮部久蔵は、沢山の戦地で沢山の人々に出会い、時には煙たがられながらも「生きて帰ること」を信念に闘いぬく。ただ臆病者で逃げているのではなく、身体を鍛え、戦闘機にも詳しく、自分を持ち生きている。自分が生きたいからではなく、家族のために。

何年か前に鹿児島の知覧で、特攻隊の方々の遺書を目にしたことがある。その時は、昔の人はすごいなと思うくらいであった。しかし、今はその一つ一つに沢山の隠された愛情や優しさがあるんだなと感じることができる気がする。国のために、天皇のために、悔いはない、前は純粋に特攻の人々はそう信じて戦っていたのだと思うこともあった。しかし、あの手紙には、大切な人を心配させたくない、安心させてあげたいという強く大きい優しさが隠されているのではないかと思った。

宮部久蔵は、教官として任務につく。その後、その教え子たちは戦闘機の操縦だけを覚え、そして特攻隊員となっていく。そんな中で、宮部は教え子たちの犠牲の中で自分だけが生きていることを実感し、そして自ら特攻を志願する。特攻隊として出撃する日に、昔の教え子の大石の戦闘機と自分の戦闘機を交換し、宮部は特攻として戦死し、大石は戦闘機のエンジン不調によって、現代へ生き延びることができる。そうして、生き延びた大石は、宮部の妻と子供を守っていくという結末に続いていく。

自分は、このように宮部自身が戦争を生き延び家族の元へ戻るのではなく、大石という教え子が宮部の代わりに生き延び、そして家族を守っていくという終わりも宮部らしいと思う。そして、この物語はフィクションであるけれど、きっと何人もの宮部久蔵や大石がいたのではないかという気になった。家族のために、大切な

人のために、今の自分には想像もできないほどの信念であの戦争を戦った人々がいたのだと思う。

お盆になると、実際に戦争に行った経験のある親戚の家に行く。その人は通信兵をしていた。毎年たくさんの話をしてくれる。今年は例年とは少し違った気持ちで話を聞ける気がする。

第2位

『あっこと僕らが生きた夏』を読んで

機械工学科　一年
宿　野　圭　佑

私は、この本を読んでとても衝撃を受けました。それは、自分とほとんど同じ年齢の子が、がんという重い病気になってしまうということが、あまり信じることができなかったし、がんを発病したことによって、本人はもちろん、家族や学校の友達など、たくさんの人がどれだけつらい思いをしてきたかが、とてもよく伝わってきたからです。

この本は、みんなから「あっこ」と呼ばれ慕われていた高校生の少女に起こったことを書いた、ノンフィクションの本です。

あっこは、野球部のマネージャーとして、他の人と何も変わらず、普通に生活していましたが、高校二年生で上咽頭がんというがんが見つかり、すでに進行していると知らされます。それからあっこは、入退院を繰り返すことになります。

あっこは、野球が大好きな明るい女の子です。小学校では剣道、中学生ではソフトボールのピッチャーを務め、いつもは目立ちたがり屋だけど、大好きな野球では他人のサポートをするマネージャーとして頑張り、部員からもクラスメイトからも慕われるような女の子です。

しかし、文武を両立できるほど完璧でもなく、普通に恋もし、楽しくて仕方ないような高校生活を送っていました。

あっこの体に小さな変化が起きたのは一年生の冬、首に小さなしこりが現れました。

そのしこりは徐々に大きくなり、痛みも伴うようになり、大きな病院での検査で上咽頭がんが見つかり、すでに首のリンパにも転移していました。

入院が決まっても、あっこはクラスメイトや野球部員の前では感情を押し殺し、気丈にふるまいました。

あっこの通っていた高校は、甲子園に行けるほど有力視されていたチームではなかったのですが、「あっこのために」と部員たちは精一杯の練習を積んでいきました。

あっこの存在が、彼らにとっての支えであり、同時に大きなプレッシャーでもあったのでしょう。

そして、夏の高校野球選手権の地方大会で、奇跡の優勝を成し遂げました。

人は、こんなにも強い気持ちを持てるものなのかと、私は思いました。

あっこにしても、ナインにしても、その強い気持ちでつらさや痛みや練習を乗り切り、そして甲子園出場という目に見える結果を残しました。

人は自分のためだけでは甘えや弱気がでるものですが、誰かのため、この場合は「あっこのため」、がんという大変な病気を抱えたあっこが喜ぶだろうという想いだけで、こんなすごい結果を残した野球部に、私はとても感動しました。

その後、あっこは退院し、白血球の数値を懸念されながらも修学旅行に行けました。

私は、ここにも強い意志の力を感じました。気持ちで全てがうまくいくわけではないですが、やはり何か事を起こす時には、人の意志・気持ちというのはすごく大事だと思いました。

それからのあっこには、つらい出来事が起こ

りました。背骨にがんが転移したのです。しかも、上咽頭から離れた背骨に転移したということは、治療をしても完治しないということです。

「治るとは言えない。白血球の値が上がらなければ治療はできないし、逆に、化学療法が原因で亡くなる可能性もある。」

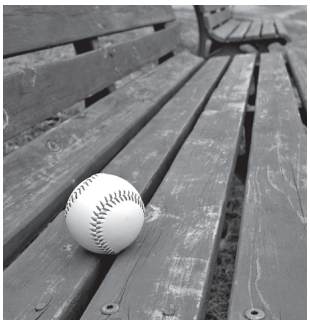
という医師の言葉に、あっこは、

「もう、治療はしません。」

と口にします。治療から逃げたいのではなく、残りの時間を自分らしく生きたいと、残りの時間を全て野球部の仲間と過ごすために使うという「命の決断」です。

十七歳という若さの女の子がこれほどの決断をするのに、どれほどの思いがあったのかを想像すると、私はとてもつらい気持ちになります。

今まで私は、大きな病気もせず、命はあたりまえにあるものだという感覚でいましたが、命がなくなるまで頑張って頑張りぬいたこの本を読んで、「今」を大事に一生懸命生き続けることの大切さを知ることができました。



第3位

十人十色 ー『レインツリーの国』を読んで

都市・環境工学科　一年
佐藤美鳩

レインツリーの別名はアメリカネムノキで、ネムノキの花言葉は「歓喜」、「胸のときめき」。つまりレインツリーの国とは、「歓喜の国」そして「心ときめく国」。

私がこの本を手に取ったきっかけは、『図書館戦争』だった。その本の中にレインツリーの国が登場していた。『図書館戦争』の物語にも耳の聞こえない友人が出てきており、その生活や考え方が書かれているのを読んでいたから、最初はどちらかといえばひとみ目線で読んでいた。きっと今こんな気持ちなんだろう。どうして伸は分かってやれないんだ、と。けれど、読み進むに連れ、やはり伸目線にならざるを得なかった。それは、やっぱり私は健聴者だから。どんなに本を読んだって、障害を持つ人の気持ちが完全に分かるわけではない。

ひとみがエレベーターに乗った時、重量オーバーのブザーが鳴るが、それが聞こえずにそのまま乗り続けてしまう、というシーンがある。本を読んでいる私はひとみの耳が悪いと知っているから、仕方ないじゃないか。と思うけど、もし私が何も知らずにエレベーターに乗っていたら、伸だったとしたら、きっと同じように冷ややかな視線を向けていただろう。何をしているんだと怒鳴りつけていたんだろう。そう考えると悲しくなった。

「傷つけた埋め合わせに自信持たせてやろうなんてありがとう。」こんな風に捨て鉢になってひどいことを言われたあとに、伸が言った言葉。「ケンカしようや。お互い言いたいことも溜まってると思うし、仲直りするためにきちんとケンカしようや。」これが言える伸を、私は尊敬する。

中学の頃、クラスに脳に障害をもつ友達がいた。その人は人とコミュニケーションをとるのが苦手だったから、私もイラッとくるようなことを言われることがたくさんあった。けれど、そのとき私は、相手は特別なんだから仕方が無い、とコミュニケーションをとることを避けていた。だからその一年間、それ以上衝突することもなかったが、仲良くなることもなかった。

そんな私とは違い、ちゃんと正面からぶつかって、向き合おうとする伸はすごいと思う。

「遠慮」と「配慮」の違い。気をつかうところはつかうけれど、言うべきことはしっかり言う。自分を軸に考えるか、相手を軸に考えるかで結果は大きく変わってくる。それは、相手が誰で

あろうと同じなのではないだろうか。
　ひとみは、自分は耳が聞こえないということで誰にも分かってもらえないと思っていたけれど、伸にも、父から忘れられるという辛い過去があった。作者がこの作品で伝えたかったのは「障害のある人も普通の人と変わらない」ということだと思う。
　自分が健常者だからって、ほしい物が全て揃っていて、悩みなんて一切なくて幸福かといったらそうじゃない。なかなか思いどおりにいかないことがあって、我慢だってたくさんしている。気を遣うのも自分と違うのも、個性が存在する前で自分の思いも辛さもなかなか分かってもらえないのは当たり前で、何も障害のあるなしに限った話ではない。だから、お互いを認めて向きあうことが大事だと思う。
　ひとみは全部諦めて、自分に自信がなくて向き合うことから目を背けていた。そんなひとみが、誰にも引け目を感じずにありのままの自分を素直にさらけ出せる場所、それが「レインツリーの国」、「心ときめく国」だった。そこで伸に見つけてもらい、勇気と自信を持てた。
　人それぞれ抱えているものも思いも違うし、他人をすべて理解することはできない。だからこそ、お互いが歩み寄って理解しようと努力し、勇気を出して前向きに進んでいきたい、そう感じた。

佳作

『智恵子抄』を読んで

機械工学科　一年
篠田侑実

　私は読んだことがある『智恵子抄』をもう一度読み返しました。中学の時から、こういった日本文学が好きでいろんな作品を読んできました。中学の時はまだ理解し難かった文章も、ふと読み返してみるとまた感じる事が変わってくるんだなと実感しました。
　この『智恵子抄』の中で最も有名な詩は「レモン哀歌」です。教科書に載っていることも多いそうです。私は中学生の時、なぜ高村光太郎は妻の智恵子が亡くなった時にレモンをそこに置いたのかが理解できませんでした。でも、今もう一度意味を考えながら読んでみるとなんとなくですが、わかったような気がしました。かなり弱っていた智恵子が病床で、一瞬正常な意識を取り戻す瞬間をレモンのしぶきに重ねているのではと思いました。この智恵子の意識はほんとに一瞬しか戻らず、ぱっと消えてしまうレモンのしぶきのようにたとえさわやかでありながらも、とても悲しい詩だと私は感じました。
　もう一つ「あどけない話」という詩も有名です。「智恵子は東京に空が無いといふ。ほんとの空が見たいといふ。私は驚いて空を見る。桜若葉の間に在るのは、切っても切れないむかしなじみのきれいな空だ。どんよりけむる地平のぼかしはうすもも色の朝のしめりだ。智恵子は遠くを見ながら言ふ。阿多多羅山の山の上に毎日出ている青い空が智恵子のほんとうの空だといふ。あどけない空の話である。」これを読んで私は、智恵子の言う「ほんとうの空」というものが何だったのか、何を意味していたのかがいまだにわかりません。ただ、この詩は智恵子が発病する前に書かれたもので、最も幸福に満たされている時代のものです。この他に「樹下の二人」という詩もあり、それも含めて何気ない日常も二人にとっては幸せなものだったんだと思います。
　たくさんの作品を読んでいると、高村光太郎は智恵子が発病する前、発病後、亡くなった後、いつどんな時も智恵子を愛していたんだなと思いました。ただこの『智恵子抄』は高村光太郎が綴ったものなので、智恵子が高村光太郎をどれだけ思っていたかはわかりません。もしかしたら、智恵子は鬱陶しく感じていたかもしれません。これが詩の面白いところだと思います。例えば好きな人に綴る詩だとすると、書いている方は思っている事を好きなだけ書けます。でも書かれている当の本人は何とも思っていなかったり、逆にあまり好きではないという場合もあります。この詩を読んだ人の現状、経験、

考えによってたくさんの感じ方ができます。説明的文章などとは違い、答えが一つではないのが詩のいいところだと思います。

また、この一冊を通して高村光太郎の作風が少し変わっているように思えます。先程、いつどんな時も高村光太郎は智恵子を愛していたと書きました。確かにそれはそうだと思います。ただ、智恵子が亡くなった後に書かれた詩は、表現が少し優しいものになっています。やはりとても辛かったんだと思います。そんな事も詩から読み取れます。

本を読んで感じることというのは、この読書感想文というものがあるぐらいですから、一冊の本だったとしても人それぞれです。また読むタイミングによっても違います。だから、今まで読んだことのある本でも、もう一度読んでみるといいものだなと思いました。

佳作

『永遠の0』が教えてくれたもの

電気電子工学科　一年
松崎萌花

戦後七十年目の今年、私はこの本に何か特別なものを感じた。この物語はフィクションだがおそらく現状に近かったのだろう。七十年前はこのようなことが起きていたと知り、私はとてもショックを受けた。この本を読み終えた時、私は自然と涙を流していた。それくらいの衝撃だった。

この本は、佐伯健太郎という青年が姉と共に本当の祖父である宮部久蔵という男の人生について調べていく、というものである。宮部は特攻隊で亡くなった。彼は「必ず生きて帰る」と妻に約束したはずだったが、自らの命を犠牲にして相手を攻撃する特攻という方法で亡くなった。なぜ、彼は特攻を志願したのか。そうやって伏線を解いていくうちに、ある一つの真実が浮かびあがってくる。私はその真実を知った瞬間、苦しくなった。胸がしめつけられた。と同時に、宮部久蔵という男の偉大さを感じた。宮部は助かるはずだった。宮部が特攻する時に乗るはずだった飛行機はエンジンのトラブルがあった。彼はそのトラブルに気づき、別の特攻隊員と飛行機を交換したのだ。もし私がそのような立場だったら、交換しないと思う。今の私にとって一番大事なのは自分の命だからだ。死が避けられない状況で生きる希望の光が見えた時、普通の人間なら、それに乗りたいと思うはずだ。しかし彼はわざわざ交換した。私は最初、その理由がわからなかった。「生きて帰りたい」と懇願していたはずだったのになぜ、と私は読みながら考えていた。そして読んでいくうちにその理由がわかった。彼は特攻隊員の教官をしていた。教え子が何十人と死んでいった中で自分だけ生きて帰るわけにはいかない、そう思ったのだろう。飛行機を交換した隊員にはすべてをゆだねた。生きるという権利も妻や子どもを幸せにする権利も。彼は、「必ず生きて帰る。たとえ死んでも必ず帰ってくる。」と言っていた。死んでも帰ってくるというのは、たとえ自分が死んでしまったとしても、自分の意志を継いだ者が家族を守ってくれる、という意味なのだと私は思った。改めて私は、偉大な男だなと感じた。

この本を読んで私が思ったことは二つある。一つ目は、「戦争と平和」について私たち若い世代がもっと深く考えなければならないということである。今の若い人達の中で、広島へ原爆が落とされた日、長崎に原爆が落とされた日、終戦記念日を知らないという人がとてもたくさんいるということを以前テレビで知った。私はこ

の３つの日は知っておかなければならないと思っている。なぜなら、日本を大きく変えることになった日であるからだ。「知らない」ということが「恥ずかしい」と思わなければならない。今の日本は平和ボケしていると思う。今ある平和が当たり前だというふうにとらえない方が良いと思った。七十年前起こった出来事をちゃんと知っておくべきだ、とこの本を読んで身に染みて感じた。悲しいという言葉一つでは表せない。戦争はあってはならないものだ。私たちはそれを無くすために尽くさなければならないと思う。二つ目は、思いやりというものの大切さだ。宮部はとても大きな思いやりを持っている。年下でも敬語を使い、教官としても慕われ、そして生きる道を与えるという思いやり。今の時代にこんなに大きな思いやりを持っている人は少ないと思う。思いやりを持つことで宮部はとても慕われていた。相手のことを考える時には、相手の気持ちになり同じような立場になっていた。私もそのようなことができる人間になりたいと思った。それができてこそ、立派な大人になれると感じた。私はそのようになれるのか、まだわからないが、そうなれるように努力をしていきたい。思いやりを持って行動していきたい。

この本は忘れかけていた人として大事なものを教えてくれた。私はこれを読んで得たものをこれからも大切にしていきたい。

佳作

『犬と私の10の約束』を読んで

都市・環境工学科　一年
岡崎　夢乃

大好きな犬の写真と、耳にしたことのある題名、10の約束に興味がわき、私はこの本を読むことになります。

そして、この本を読み終えた私は、命と向き合うこと、その責任の重さを改めて感じることになるのです。軽い気持ちで手に取った一冊の本が、人生の中で一番忘れてはいけない、大切なことを深く考えさせてくれることになるとは思ってもいませんでした。

この本には、犬を飼うための約束が10個描かれています。10個の約束は、あかりが犬を飼うときに母とした約束のことです。1、「私と気長につきあって下さい。」あかりが大きくなると、ソックスのことを気にかけなくなります。また、飼う時には覚悟しておいた留守が出来ないことを疎ましく思う気も起きます。このような事は、犬を飼うときだけでなく、子育てや、介護などにもあてはまることだと思いました。育てたり、お世話する事は楽しいだけでなく、自分の時間を犠牲にしたりしなければなりません。私もいつかは、自分の労力を誰かのために使いたいと思いました。そうすれば、あかりみたいに、もっと生きがいを持てるようになるのではないかと思います。2、「私を信じてください。それだけで私は幸せです。」あかりは、一時、ソックスと離ればなれになります。しかし、あかりはずっとソックスのことを思い続けていました。ソックスもあかりと離れていて、辛いはずですが、その中にも、あかりから思われているという喜びが感じられました。この場面は、私も共感するところがありました。お互いを信じあうことが、一番お互いの距離が近いことだと思います。3、「私にも心があることを忘れないでください。」これは、犬を飼う時だけでなく、生き物と接する時に常に心に留めておく大事なことだと思います。4、「言うことをきかないときは理由があります。」私も、理由があって言うことをきかないときがあります。犬も人間も同じなんだな、と驚きました。5、「私にたくさん話しかけてください。人のことばは話せないけど、わかっています。」ソックスは人が悲しんでいるときは、なぐさめ。人が喜んでいるときは、喜び。とても優しくて心が温かくなりました。6、「私をたたかないで。本気になったら私の方が強いことを忘れないで。」人間より、犬の方が強いことは本当だと思いました。最近、飼い主が犬に暴行するという話を耳にします。しかし、犬が飼い主に暴行するという話

はあまり耳にしません。それは、犬が飼い主のことを大切にしているからではないかと、ソックスの行動を見て感じました。人間より犬が強い。つい忘れそうになることだと思います。ですが、しっかりと心に留めて、犬と接することができれば、飼い主が犬に暴行することは少なくなると思いました。7、「私が年を取っても仲良くしてください。」8、「私は十年くらいしか生きられません。だからできるだけ私と一緒にいてください。」生きられる期間は違っていても、すべての生き物には、生まれた限り死というものが、いつかはやってきます。けれど、その時間のなかで沢山の思い出を作り、この人に出会えて良かったと思えるように毎日を大切にしていきたいと思いました。9、「あなたには学校もあるし友だちもいます。でも私にはあなたしかいません。」一番心に残っている約束です。ソックスは自分の意志ではなくあかりと出会いました。物心つくまでの数ヶ月をあかりと過ごしたせいで、ソックスは犬語を話せません。あかりに赤ん坊のときから育てられたから、本当に心を通わせられるのはあかりしかいないのです。私にはあなたしかいません。嬉しくも感じますが、責任も感じる言葉です。この約束を受け止める覚悟がある人しか、動物を飼ってはならないと思います。10、「私が死ぬとき、お願いです、そばにいてください。どうか覚えていてください。私がずっとあなたを愛していたことを。」これは約束というより、ソックスからの最後のメッセージのように思います。ソックスが天国へ行くときも、あかりを思っていたことにとても感動しました。

命をめぐっている物語ですごく夢中になりました。10の約束から、多くの大切な事を学ぶことができて、自分自身、成長したように感じます。いつか、動物を飼ったり、子どもを育てることになったら、この本に教えてもらった10の約束を守って大切に育てていきたいと思います。

佳作

強く優しく
―『氷点』を読んで

都市・環境工学科　一年
手嶋　萌

私の母はよく、私に「お前はもらい子なんだよ」と冗談を言う。もちろん、私はもらい子ではないとわかっているので、我が家ではすぐに笑い話になる。しかし、『氷点』を読み、もし私が本当にもらい子だったとしたら、と深く考えさせられた。

辻口夫妻には、徹とルリ子の二人の子供がいた。ルリ子は、三歳の時に、家の側の林の中で殺害された。ルリ子の父親はルリ子が殺されたのは、妻がルリ子を一人外に出し、知り合いの男と二人きりで家にいたせいだと考えた。そこで父親は、ルリ子を殺した犯人の娘を妻に育てさせて「敵のために一生を棒に振った」と口惜しがらせよう、と計画する。そうして、辻口家に出生の事情を知らされず、実の娘として引き取られたのが、陽子である。

陽子は幼い頃から、素直で明るく恐れを知らない子供だった。引き取られた直後から、泣かず人見知りもせず、すばらしい子だと母親に自慢されている。既に、私とはえらい違いだ。私は夜泣きが激しく、人見知りもしたそうで、両親に事あるごとに「お前は大変だったんだから…」と言われる。陽子は母親にしてみれば、それはそれは可愛いらしい娘だったろう。犯人の子と知らない母親にとって、陽子は非の打ち所の無い子供だった。しかしある日、母親は陽子の出生の秘密を知ってしまう。そこから彼女の陽子に対する接し方が、大きく変わっていく。私は読んでいて、陽子がかわいそうで仕方がなかった。自分のせいではないのに、両親から愛されず、母親からは度々いやがらせを受けその度に傷つく。それでも、自分を育ててくれていることに感謝して、家族のことを大切にする優しい人だったからだ。私がもしもらい子だった

として、母親からいやがらせをされたりしたら、そんな人と一緒に生活するのはたえられないと思う。育ててくれることは有難いと思うけれど、自分のことを愛してくれない母親といるのはすごく辛い。「今私に対してどんなことを考えているのだろう」とか、「こんな事を話しかけたらどう思うのだろう」とか、「私はこの家にいても良いのだろうか」など、ネガティブな事ばかり考えてしまう。陽子のように、「こんなことぐらいで人を恨みたくない」などと、前向きで明るい考え方はできないと思う。陽子の明るさや強さは、見習わなければならない良い所だとはわかるのだが、同じ立場になった時、私にはそんな心の余裕はつくれないだろう。でも、陽子の決して屈しない強さを見て、私も少しでも陽子のように、凛とした生き方をしたいと思わされた。

陽子は強いだけでなく、とても優しくもある。陽子は誰の悪口も言わない。人の悪い所も良い所に感じているかのように、前向きに優しく考えるのだ。よく、「人は悪い所のほうが目につく」というが、陽子は真逆なわけだ。私も、人の良い所より悪い所のほうが、よく目についてしまっていると思う。なぜなら、「あの人はあそこが悪い」と思うことで、自分のほうが良い人間だと思いたいからだ。でも陽子を見て、その癖は自分の為にならない、と強く思われた。陽子は悪いところを見つけても、それに勝る良い所を見つけ、その人に感謝して生きている。その姿を見て、陽子は嫌いになれないと思った。自分に感謝してくれている人のことは、誰もが大切にしたいと思うものだ。陽子の周りでは、幸せの連鎖が起こっている。お互いの関係が、お互いにとってプラスに働くのだ。それに比べて私の考え方はどうだろうか。人の悪い所を見つけて満足し、その人に対する自分の印象には悪いものが残ってしまう。お互いの関係はマイナスからのスタートだ。一つも良い事など無い。私はこの本を読んで、今この時から、人の良い所ばかりを探す、陽子の優しさを見習わなければ、と思った。

陽子は、大人達がそれぞれに勝手な事をしたせいで、端から見るととんでもない不幸な人生を送っている。しかし本人はとても強く優しく、その生き様に感動した。それに比べて私はどうだろうか。ごく普通の家庭で平和に生活させてもらえているのに、陽子のように堂々と生きているだろうか。まだまだと思う。私も陽子のように強く優しく、凛とした生き方を、身に付けたいと思う。

佳作

心理の真理
―『WILL』『翼』を読んで

都市・環境工学科　一年
若菜遼甫

私はこの二つの物語を読み始めたとき、二つは関係の無い物語だと思っていた。『WILL』は葬儀屋の物語、片や『翼』はキャリアウーマンの物語だったからだ。しかし、二つの物語を読み終えたとき、二つの物語はまるで兄弟のようだと思い直した。二つの物語の裏にあるものを想像すると、その関係性に心を動かされたのである。

二つの物語は、よく似ている。どちらも、ある女性の視点から、日常の中の小さな事件を切り取って描いたものである。そしてどちらも、「生と死」を扱っているのだ。

しかし、二つの物語は、どこか違う。その違いが、二つの物語が双子、ではなく、兄弟のようだと私に思わせたのだろう。

私が気づいた違いは、大きく二つであった。

まず、違うのは、「兄弟」の主観である。『WILL』は、「死」を中心として人生や幸せを考える物語であるのに対し、『翼』は「生」から死様を考える物語である。

私は人生を『翼』で考えている、と思う。きっと自分に関わりの深い「死」をまだ知らないからだろう。

「死はスタートだ。」

という言葉を聞くが、それは命の巡りの話であって、この話とは無縁である。だから人生は「死」がゴールなのだと思う。ゴールに辿り着く前に最高速度（『翼』の言葉を借りるなら「真実の人生」）に手が届いたとき、命を全うしたと言えるのではないか。

私が「死」をゴールだと思うには、もう一つ理由がある。私は「自分の死」が信じられない、いや、分からないのだ。だからこそ心のどこかで、ゴールに向かうまでの道筋を考えながらゆっくり歩きたいと願っているのかもしれない。

次に違うのは、「兄弟」の「死」に対する考え方である。『ＷＩＬＬ』では、死んだ者の意思というものは、未来形の意思・ＷＩＬＬであり、遺された者の未来である。一方、『翼』では、「死」というものは、死んだ者についての記憶を持っている全ての者の死をもってはじめて「死」になる。つまり、記憶の消去、即ち「死」であり、その人の「死」が自分の一部の消去なのである。

このことについては、私は『ＷＩＬＬ』の考えである。『翼』の考え方に少し反発を覚えたのだ。なぜ反発を覚えたのか。それは、『翼』の考えでは、「他人の死」が残らない、そう私には見えたからである。その人の死が自分の一部の消去、というのはある意味では正しい。しかし、そこに死んだ者の「意思」があれば、遺された者の中に死んだ者は残る。その一部となって埋まる。そう思った。

そして、『ＷＩＬＬ』には「遺志」という言葉は出てこない。本来、「死んだ者の意志」と「遺志」は同じ意味である。それとあえて使っていないのは、「遺志」は死んだ者が遺した志であり、未来につながらない「記憶」だからである。これらのことから、「死」は未来へ思いをつなぐものなのだと思ったのである。

ここまで、「兄弟」の違いについて述べてきた。そして私はそこから、大きな一つの結論に思い至った。その結論こそ、私が「兄弟」から学んだことなのだ。

「兄弟」は、根底が同じである。考え方は違い、ゴールも正反対だ。それでも思い至るのはどうちらも同じ、「真実の人生」とは何かというところだったのだ。

私は物心ついた頃から、自分がやりたいことをやれているか、なりたい自分に近づけているのかを常に考えていた。その答えはいつも「分からなかった」。そしてそれは、激しい自己嫌悪と何者にもなれない自分が消えてしまうのではないかという不安であった。

一つの結論に辿り着いた今でさえ、そんな感情が無くなっている訳ではない。できるならば無くしたいが、今無くなるべきではないとも思っている。「真実の人生」というものは「自分や大切なものを幸福にするための意思を持つ人生」である。自分が悩んでいるのは、「変えたい」という「意思」を持っているからである。ならば、悩んでいる今こそが「真実の人生」なのではないか。

私はこれからも悩み続けるだろう。「死」を誰かにつなげられるような人になれるように。それが「真実の人生」だからだ。自分の幸せに気づけるのは、まだずっと先の話なのかもしれないが。

佳作

『神様のシナリオ』を読んで

都市・環境工学科　二年
小谷　華加

私が『神様のシナリオ』に出会ったきっかけは母が図書館から借りてきているのを見てなんとなく読んでみようと思ったことです。正直、私は小説があまり好きではありません。なぜなら、本に描かれている「主人公」の物語は幸せな話でも悲しい話でも美化されていることが多く、どうしても「駄目な自分」と比較し心苦し

く思ってしまうからです。この本はどうだろうか。そんな不安を抱えながら読みました。

読み終えたとき、私はショックでしばらく放心してしまいました。主人公の尊敬する人物が死んでしまうからです。まるで自分の心の一部が欠け落ちたようでした。ふと、もしかしたら主人公もこんな気持ちだったのかなと思いました。ここまで物語に共感したのは久しぶりでした。

主人公の咲子には由美子という親友がいます。由美子は咲子の欲しいものは何でも欲しがり、常に咲子より早く手に入れていました。そんな由美子に咲子は劣等感を抱き、自分が負けるのは「宿命」であると思っていました。その後、様々な人たちに出会い、考えを改めた咲子は夢を叶えるために奮闘するのです。

「苦い現実を受け入れる勇気を持て」

これは友達の順平が咲子を叱咤する場面で、一番印象に残った言葉です。失敗した理由を振り返らず、「宿命」だからと言い訳をし続けた結果、咲子は事実を受け入れられないままでいました。しかし、この順平の一言をきっかけに咲子は現実から逃げるのをやめ、自分のやり方を見直すようになりました。私はこのセリフを見たとき少しドキリとしました。なぜなら、私も咲子のように劣等感を抱くことがよくあるからです。

物心ついたときから、周囲には私より優秀な人間がたくさんいました。その筆頭は姉です。運動や勉強、口喧嘩などあらゆる場面において姉に勝つことができませんでした。次第に誰に対しても負けるのが当たり前になってしまい、年齢に関係なく自分は劣った存在なのだと思うようになりました。それは咲子の「宿命」によく似ていました。

しかし、咲子にとっての「苦い現実」と私にとっての「苦い現実」は少し違うような気がしました。咲子と私の違いは努力しているかいないかです。咲子は努力をしていたけれど、常に自分のやり方が正しいと思っていたため「失敗した事実」を認めることができませんでした。私は今まで一度も咲子のように勝つために「努力」というものをしたことがありません。それは失敗するのが怖いからです。努力をしなければ、努力して物事をやり遂げている人間に負けてしまっても仕方がないと思えるから、努力するのをためらっているのです。

神様のシナリオとは私たちの人生のことで、今は思い通りにならなくても、最後はつじつまが合うようになっているものだと咲子の父親は言いました。咲子はがむしゃらに生きるのをやめ、前向きに生きる努力をしていました。だからこそ、神様のシナリオは咲子の望む方向に導かれていったのだと思います。それに比べ、私はどうでしょう。頑張ることも、良い方向に考えることもしていないのに、自分の願いなど叶えられるでしょうか。

私はこの本を読んでたくさんのことを学びました。まずは失敗を恐れず努力すること。もし、上手くいかなかったとしても、必ず反省をし次に繋げられるようにすること。そして自分の今までの経験は決して無駄にはならず、信じていればいつかは報われるということです。これからは「駄目な自分」と卑下するのはやめ、後ろ向きの自分を変えられるように頑張っていきたいと思います。

佳作

幸福になるには
ー『自分の人生に一番いい結果を出す幸福術』を読んで

電気電子工学科　三年
平野音瑠

「人が意識に目覚めた最初の瞬間から、意識が消える最後の瞬間まで、ひたすら求めるものは〝幸福〟だ」今回私が読んだ本の中にこのような一文があります。多くの人が、自分は不幸だと嘆いていますが、それは、思い通りにならない

ないから、求めるものが手に入らないから。そして、その求めるものを大きくまとめると、幸福となるのではないでしょうか。そのように考えれば、人が一生幸福を求めているというのも納得できます。では、幸福を手にするためには何をすれば良いのでしょうか。そのヒントが『自分の人生に一番いい結果を出す幸福術』という本に書かれています。この本はカール・ヒルティの名著『幸福論』をもとにして、私たちが幸福を得るための良い生かし方を記しています。

まず、幸福を得るためには「人生の試練」を乗り切らなければなりません。しかし、試練に立ち向かうのは怖い。立ち向かったものの、失敗してしまうかもしれない。そうなればより一層悲壮感が増し、幸福になれないのではないか。そう考えて試練を避けようと考えてしまうかもしれません。ですが、それは幸福から遠ざかっているのです。本には「人は、とかく〝いいこと〟を想像するより、〝悪いこと〟を想像しがちである。この〝マイナス想像〟が、せっかくの幸福感を台なしにする。そこで覚えておきたいのは、日々経験することの九割は、想像したほど恐ろしくもなく、我慢できる範囲のことだ、ということ。」とあります。つまり、マイナス想像を膨らませて逃げるよりも、乗り越えなければならないのだと心に決め、行動をおこした方が幸福は得られるのです。そうは言っても、強い意志を持ち続けるのは大変なことです。人は弱い心を持っています。それに勝てなければ、試練を乗り越えることも難しいです。その弱い心に勝つ方法も本には書かれていました。それは、〝高次元の動機〟を持つことです。高次元の動機とは、高い目標に向かってチャレンジする意欲や、家族など誰かのために仕事をしているという責任感や愛情のことです。自分のためだけではなく、大切な人のため、その思いはとても強く、自然と弱い心は消えていきます。そうなれば試練を乗り越えることが出来るでしょうし、乗り越えている時さえも、喜びを感じることができるでしょう。避けて通れない試練は、幸福への最大の近道なのです。

ところで、この試練というものに立ち向かったけれど、乗り越えられなかった、中途半端に終わってしまった。そんな人もいるのではないでしょうか。そして、その理由の一つは〝時間が無い〟。私自身も学生ですから、試験前には一生懸命勉強します。その度に、もっと時間が欲しい、時間が足りない、と思いますし、周りからも似たような言葉を聞きます。では、本当に時間は足りてないのでしょうか。無駄に浪費してはいないでしょうか。慢性時間不足の解決法として、本には細切れの小さな時間を活用することも大切だと書かれています。例えば、夕食前に五分間時間ができたとして、ほとんどの人は、そのぐらいの時間なら何もしなかったり、スマートフォンを触ったりするのではないでしょうか。ですが、その時間も、勉強時間に当てられるのではないでしょうか。ノートを数ページ見返したり、英単語をいくつか覚えたり、そのような使い方もできると思います。それは積み重なっていけば、結果的に、多くの勉強時間を確保したことになります。このような、何かを始めるには少ない、何気なく捨てている時間というのは誰にでもあると思います。このわずかな時間を上手に使えるようになれば〝時間が無い〟という思いも減っていくのではないでしょうか。そして、それは充実した時間を過ごしているという思いになり、幸福感を得られるのではないでしょうか。

人は一生幸福を求める。しかし、その幸福というのは思いもよらないところにあるかもしれません。一見幸福とは程遠いところであったり、何気なく過ごしている日常の中であったり、そしてその幸福には完成形がないのです。だからこそ、どこまでも高く登っていけるし、どこまでも深く掘り下げることもできるのです。そうして求め続け、手にした幸福は自分一人のものではなく、まわりの人すべてを幸福にすることができるのです。この本を読んで、今まで捨てきた幸福を手にする機会に気付くことができました。過去のことはどうすることもできないけれど、未来はこれからどうにでも変えられます。『幸福論』を記したカール・ヒルティ自身も

実際、現実生活において、「世界一の幸福者」として充実した人生を生きた人であったそうです。この本を読むことで幸福になれたなら、それは著者の幸福につながり、ヒルティのより一層の幸福になるのではないかと、私は思います。

編集後記

学生図書委員長
（電気電子工学科五年）
平野瑠唯

「読書感想文」とは本を読み、考え、感じたことを文章にまとめたものです。これの面白いところは、同じ本であっても人によって考え方が異なること、また、似た内容でも表現方法が全く違うことだと思います。今年も皆さんが書いた読書感想文の審査が行われ、私も審査員に加えさせていただきました。素晴らしい作品が多く感嘆してばかりでした。

私個人の感想としては入賞者の方々は、作品の冒頭部分の書き方が上手だったと思いました。本を読むに至った動機、本を読んで最も強く感じたこと、本からの文章の引用など、人それぞれでしたが、どの作品も、文の始め方、言葉の使い方、用いた表現、一段落目の量、文章の閉じ方など、細かな工夫が組み合わさって、魅力的な文章となっており、一瞬で作品に引き込まれるものばかりでした。また、今回の作品は、「命」について考えさせられるものが多かったように思います。「生と死」「病気」「戦争」、普通に暮らしていれば、深く考える事も少ないでしょうし、本を読み、心を動かされることがあっても、その曖昧な思いを言葉で表すのは難しい事だと私は思います。そこに向き合い、本から文章を引用したり、現状の自分や過去の経験を改めて考え直したりして、自分の言葉で書き表したことも、入賞の理由の一つであると思います。

自分以外の人の読書感想文を読むことは、本を読むことと同じくらい意味のあることではないかと思います。本を読むことで新しい知識や考え方を得ることができますが、同じように、感想文からは自分ではない人の考えを知ることができ、読んだことのある本でも新しい見方を発見できるのです。そこから自分の世界を広げることもできるのではないでしょうか。

今回入賞者は全員三年生以下でした。忙しいとは思いますが、四、五年生の積極的な自主投稿をお待ちしています。

作文以外の方法で、自分の考えを表現する場として、学生図書委員会は読書会を主催しています。気軽に参加していただけると幸いです。

最後になりましたが、校内読書感想文コンクールを開催するためにご尽力いただきました先生方、関係者の皆様、作品を投稿してくれた学生の皆様、本当にありがとうございました。

平成27年度 読書感想文入選作品一覧

作品名	著者名	出版社
永遠の0	百田尚樹 著	太田出版 講談社
あっこと僕らが生きた夏	有村千裕 著	講談社
レインツリーの国	有川浩 著	新潮社 角川書店
智恵子抄	高村光太郎 著	白玉書房 新潮社 他
犬と私の10の約束	川口晴 著	文藝春秋
氷点	三浦綾子 著	朝日新聞社 角川書店 他
WILL	本多孝好 著	集英社
翼	白石一文 著	光文社 鉄筆
神様のシナリオ	松居幸奈 著	講談社
自分の人生に一番いい結果を出す幸福術	カール・ヒルティ 著 齋藤孝 訳・解説	三笠書房

「もさく 第四十二号」
発行日 平成二十八年一月二十二日
発行者 大分県大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会
印刷所 三和印刷出版株式会社
住所 大分市高江西一丁目四三三三ー二二
電話 〇九七ー五九六ー七七〇〇